キリスト教学レポート

旧約聖書の神の概念について

01C050　樫山岑生

はじめに

「神は、かって預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られた。」

（ヘブライ人への手紙1：1）

われわれは旧約聖書の恒久的なメッセージと意味とをキリスト教学Ⅰで学んだ。

旧約聖書が新約の成就の準備的な目的を果たしているというのは認められる事実である。それは歴史を「B.C.(紀元前)」と「A.D.(紀元後)」に分ける偉大な出来事を望んでいる。それは新約聖書の理解のために基礎を据えている。ある意味でそれは未完成な、より大いなる全体の半分である。G・アーネスト・ライトが述べているように、

> 新約の十分な意味の正しい把握のために旧約聖書の真の理解が不可欠であるということは、それは故にきわめて明らかである。それはイエスや使徒たちが用いた聖書であった。キリスト教会はきわめて早くから旧約聖書を新しいキリスト教文書と一緒にした。なぜならばこの二つは同一のものに属し、また内的な一致によって結合されているからである。またキリスト教歴史において歴史を十分に知っている者にとっては、聖書的宗教、聖書的知性、聖書的態度、聖書的神の概念というべきものが存在する。このことは旧約聖書を旧約と新約に分離することをたしかに正当であるとしながら、同時にまたかく分離することを第二義的な事柄とするほど、両者の間に根本的な関連性があることを意味する。それに加えるに、旧約聖書の中には新約には述べられていない、クリスチャン生活に大切な価値を持つ多くの資料がある。詩篇、イザヤ書、創世記、ヨブ記等は、キリスト教の信仰的文献の大きな財産であり続けてきた[1]。

同時に、旧約聖書はそれ自体のメッセージと意味を持っている。このメッセージは新約聖書のメッセージに反したり、異なったりしてはいない。しかしながら、それは神の言葉である聖書のこの部分にはそれ自体の独自の位置と永遠的価値とを与えられるような方法で展開され、強調されている。これら偉大でかつ、永遠的な諸貢献にふれ、またそれを強調しないような、いかなる旧約研究も完全なものとは言いがたい。

われわれは旧約聖書が聖書の真理の全体に対して独自の、そして不滅の貢献をなしている神観、人間観、歴史観の領域から、神の概念についての私論を述べたい。

神の概念は旧約聖書の中心的真理である。オットー・J・バーブは次のように述べている。「旧約聖書において圧倒的に強調されている一つの概念は神の概念である」[2]。

この概念は多くの方法をもって表現されているが、この多様性の根底に流れているものは、創世記からマラキ書にいたるまで、さらにこのことに関しては黙示録にいたるまで、決して変わらない主なる神の姿である。スネイス博士が述べているように、ギリシャ思想の目標はなんじ自身を知ることにあったが、ヘブル宗教の目標は神を知ることであった[3]。したがって旧約聖書

は神学のための資料は無尽蔵である。

それぞれの学者たちがおのおの異なった用語で旧約聖書の神の姿の輪郭を描写してきた[4]。ここでヘブル人の聖書の示している神についての知識を七つに分類し、重要と思われる事柄を聖書から見いだした。

1．創造者なる神

神の創造の御意志と力とは、旧約聖書においてわれわれがまず直面するところの問題である。「初めに、神は天地を創造された」（創世記1：1）。有限なる全宇宙はその存在を神の創造的な御意志に負うている。聖書のこの冒頭の言葉は、それに続くページを通じて、いくたびも反響している。

天は神の栄光を物語り、
大空は御手の義を示す。　（詩篇19：1）

かってあなたは大地の基を据え
御手をもって天を造られました。
それらが滅びることはあるでしょう。
しかし、あなたは永らえられます。
すべては衣のように朽ち果てます。
着る物のようにあなたが取り替えられると
すべては替えられてしまいます。
しかし、あなたが変わることはありません。
あなたの歳月は終わることはありません。　（詩篇102：26－28）

神の創造のみ業はしばしば預言者の主題であり、偶像礼拝、すなわち人間の手で造った神々への礼拝に対して絶えず反対し、しばしば嘲弄する理由の一つとなった（イザヤ書40：18－24、46：5－7、エレミヤ書10：3－6など参照）。

天を創造してこれを広げ、地とそこに生ずるものを繰り広げて、その上に住む人々に息を与え、そこを歩く者に霊を与える（イザヤ書42：5）。

あなたは知らないのか、聞いたことはないのか。
主は、とこしえにいます神
地の果てに及ぶすべてのものの造り主。
倦むことなく、疲れることなく
その英知を究めたい。
疲れた者に力を与え
勢いを失っている者に大きな力を与える。
若者も倦み、疲れ、勇士もつまずき倒れようが
主に望みをおく人は新たな力を得
鷲のような翼を張って上る。
走っても弱ることなく、歩いても疲れない。（イザヤ書40：28－31）

この創造者は一方において自然界の過程を支配し、不従順の民を審くために用いられる（エレミヤ書3：2－3、アモス書4：6－11）。預言者がしばしば語っている主の日には、自然界に大変動を生じる（ゼカリヤ書14：4－7、ヨエル書3：14－16）。自然界を造りこれを支配なしたもう神の偉大な力を思う時、われわれ人間がいかに弱く、いかに依存的存在物であるかを知らしめられる（ヨブ記38：1－42：6）。被造物を支配し、保持したもう創造者たる神についての旧約聖書の立場は最も純粋な有神論である。

神は不在地主ではない。御自分の世界におこることに対して最高級の無関心のままで存在する第一原因であり給わぬ。神は創造されるばかりでなく、御自身の世界を支配し、また保ちたもう。

2．人格的な神—生ける神

神は創造的な力であられるだけでなく、至高の人格でありたもう。彼は計画し、語り、愛し、選び、その民を嫉むほどに熱心に守り、人間と契約を結びたもう。旧約聖書の神は、哲学的抽象や倫理的な原理ではない。彼は生きた神、無限の人格者でありたもう。彼の最高の創造的行為は有限な人間を御自分のかたちに似せて創造され、その愛と忠誠とを期待しておられるということである。

われわれがキリスト教学Ｉで学んだように、創造の神（エロヒム、創世記１章１節－２章３節には「神」と訳されている）はやがて贖罪の主なる神（ヤーウェ、またはエホバ、創世記２章４節以下に「主なる神」と訳されている）として認められるようになった。「主なる神はアダムを呼ばれた」（創世記3：9）。「主なる神は女に向かって言われた」（創世記3：13）。「主なる神は、彼をエデンの園から追い出し」（創世記3：23）。神が神聖な人物であられ、知性と自己指向と自己意識という人格的特色を明らかに備えたお方であるとの確信に至ることなしにヘブル人の聖書を読むことは不可能である。

これはまた「生ける神」という言葉の使用の中にも示されている。オットー・バーブは次のように述べている。

> 旧約聖書の神をあらわす最も典型的な言葉は「生ける神」という言葉であろう。生ける神こそこれらの旧約聖書の諸文書に独自な神なのである。これは、歴史の中に行動したもう神、救いの力ある行為を行ないたもう神、人人のあいだに力をあらわされる神である[5]。

生ける神について語られる時、それと対照して非常に多く引き合いに出されるのが、木や石の偶像によって代表されるバアルであるというのは事実である[6]。しかしながら、生ける神、それはまた神の御性質が彼と人とが人格的な関係を結ぶことができるものであることをも示す。御自身の民の中に住みたもう生ける神は、彼らの敵を追い出される（ヨシユァ記3：10）。信心深い霊魂は生ける神との交わりをあえぎ求める。

> 涸れた谷に鹿が水を求めるように
> 神よ、わたしたちの魂はあなたを求めている。
> 神よ、命の神に、わたしの魂は渇く。
> いつ御前に出て
> 神の御顔を仰ぐことができるのか。　　（詩篇42：2－3）

セナケリブの軍勢に囲まれた時のヒゼキヤの願望が、イザヤに送られた至急の報知の中で述べられている（列王記下19：2－5）。事実、アッスリヤ人は彼らの力をもって生ける神に敢えて取り組もうとした。「生ける神をののしるため、その主君、アッシリヤの王によって遣わされて来たラブ・シャケのすべての言葉を、あなたの神、主は恐らく聞かれたであろう」（同19：4）。イスラエルの大きな罪は、非人格的な力や正義のための力を忘れたということではなかった。エレミヤの告訴は「生ける神である我らの神、万軍の主の言葉を曲げた者」（エレミヤ書23：36）であった。いかなる人間的な力も助け得ない時に、御自身の物ものを守り得たもう神は、敬虔な畏敬を受けるにふさわしい。異教徒であったが、ダレイオスはダニエルがししの穴で傷つけられなかったことを目撃した時に言った、「ダレイオス王は、全地に住む諸国、諸族、諸言語の人々に、次のように書き送った。いっそうの繁栄を願って挨拶を送る。わたしは以下のとおり定める。この王国全域において、すべての民はダニエルの神を恐れかしこまなければならない。この神は生ける神、世々にいまし、その主権は滅びることなく、その支配は永遠」（ダニエル書6：26－27）。

3．自己啓示の神

旧約聖書の神は不可解な神秘な神ではない。もしそうであるならば、彼の前には感傷的な不可知論のみが可能であることになる。彼は自然界によって、天使、夢の幻、さらに預言者の意識を通して、また歴史上の大事件を通して御自身を啓示された。創造者なる神の姿はあらゆる形の自然主義と異なるものである。人格的な生ける神の観念は、非人格的な汎神論をしめ出す。自己啓示の神の概念は不価値論、すなわち神を認識することは人間の知性の範囲を超えたものであるとの説をしりぞける。人間は無限の神の性質にかかわるあらゆることを知り得ないかもしれない。しかし神は御自分に関する真理で人間の幸福のために必要なことは、これを有限な知性の持ち主である人間に伝達する道を知っておられる。

「主はこう言われた」は旧約聖書のほとんどすべてに基調となっていると言ってもよい。神がこのように人間に語りかけられるのはふしぎであるとは考えられなかった。旧約聖書の記者たちは、神の創造性と人格性につづいて神が御自分を啓示したもうことを信ずるのは、昼が日の出に続くのと同様に自然であった。エデンの園を出てバビロンの平原にいたる時まで、神は御自分の御旨をその選民に知らせられた。

旧約聖書における神の啓示の多くは、きわめて単純に、しかし雄弁にしるされている。「主なる神は女に向かって言われた」（創世記3：13）、「主はカインに言われた」（同4：6）、「神はノアに言われた」（同6：13）、「主はアブラハムに言われた」（同12：1）、「主はヤコブに言われた」（同31：3）など。この語りかけの形や様式がどのようなものだったかについてはわれわれは知らされていない。それがきわめて現実的であり、個人的であったということについては少しの疑いもない。なぜならば、ある問題について主と論じ合った実例が記録されているからである。たとえば、アブラハムが何とかロトの生命を救おうと値を叩いた時（創世記18：17－33）、モーセが指導者となるべき召命に抗議した時（出エジプト記3：4－4：17）、あるいはエレミヤが自分の若さと公衆の前で語る困難とを述べて神が彼を預言者として召されようとすることに答えた時（エレミヤ書1：4－9）などである。

神の啓示の一般的な代行者は「主の使い」であった（創世記16：7、民数記22：35、士師記2：4など）。その使いはある場合には神御自身と同一であるとされている（創世記16：7、13、

22：15－16、48：15－16など)。ある人々はこれらの叙述はロゴス、すなわち三位の神の第二の位格の受肉前の顕現をさすと信じた。他の人々は神の自己顕示、すなわち時間空間の形式で神が御自分を被造物に見える姿で顕わされたのであるとした[7]。

夢や幻も旧約聖書における啓示のいま一つの形である。その顕著な実例は、ハランに逃れる道で見たヤコブの夢（創世記28：12－16)、自分の家族の上にやがて権威を持つようになると語ったヨセフの夢（同37：5－10)、ヨセフが解きあかしたパロの夢（創世記41章)、ネブカデネザルの夢とダニエルの解釈（ダニエル書2章）である。同様に顕著なのは黙示的な幻で、その実例はダニエル書7章―8章、10章―12章、エゼキエル書、エレミヤ書またしばしば小預言書の中に見いだされる。ここでは現在と未来にかかわる神のみ旨が象徴的な形や出来事によって伝達されている。

自然界における神のみ手のわざ、超自然的に与えられた神の律法、神のなしたもう奇跡やしるし、神の摂理的な歴史の支配、預言者的意識の覚醒はみな、神が御自分を人間の体験の中に知らしめたもうた、その他の方法である。

4．聖なる神

神の聖性は最初から神の性質の最も驚くべき面として示されている。預言者たち、特にイザヤは、主を「イスラエルの聖者」として知っており、彼らのこの言葉を30回以上も用いている。エジプトの地から解放の後のモーセの歌は、神の聖性に対する叙述を含んでいる。のみならずこの概念は神の人間に対するすべてのお取り扱いの根底にある。

主よ、神々の中に
あなたのような方があるでしょうか。
誰か、あなたのように聖において輝き
ほむべき御業によって畏れられ
くすしき御業を行う方があるでしょうか。　　（出エジプト記15：11）

契約の箱がエルサレムに運び込まれた時、ダビデ王はこの出来事を記念して詩を作り、その中でこのように勧めた、「御名の栄光を主に帰せよ。供え物を携えて御前に近づき、聖なる輝きに満ちる主にひれ伏せ」（歴代誌上16：29、詩篇16：8－9)。イザヤが経験した。われは汚れた者であるという自覚は、神殿において神の聖性を見まつることによって得られた。「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。主の栄光は、地をすべて覆う」（イザヤ書6：3)。「主の聖なる者」（出エジプト記28：36）は大祭司の衣にしるされ、「主よ、あなたの定めは確かであり、あなたの神殿は尊厳にふさわしい」と詩篇の記者は宣言した。

神の聖性はその至高の道徳的卓越性、すなわちすべての汚れと罪からの全面的分離をあらわす。それは人間が神を必要としていること、また苦しんでいることからの隔絶ではなく、「全く独自的に聖く、明確に聖であり、一般性、世俗性とは全く異なった一人のお方である」[8]。ボードン・パーカー・バウンは神の聖性を倫理的完全と定義している。彼は次のように言っている。

> 消極的には、聖性は悪に対するすべての傾向性と、悪を喜ぶすべてのものの不在を意味する。積極的には、それは善を喜び、善に傾倒することを含む。神のみ思いの中には悪の知識が含まれていたに違いない。しかし完全な聖性の意味する所は、神の感覚の中には悪

に対する何らの反応も見いだすことができず、神のみ旨の中には悪のいかなる実現も見いださないということである。それは更に積極的には、神のうちに道徳的完全の理想が実現していることを意味する。そしてこの理想は愛をそのおもな要素の一つとして含んでいる[9]。

神は聖であられるから、人間の中にある不義や反逆を喜びたまわない。レビ記全体は神の聖性と、神の聖性の要求を満たすために贖罪の必要なることとを教えている偉大な実物教訓である。神の聖性はその民が聖であるべきことの偉大なる動機となっている。「イスラエルの人々の共同体全体に告げてこう言いなさい。 あなたがたは聖なる者になりなさい。あなたがたの神、主であるわたしたちは聖なる者である」(レビ記19：2)。

5．義なる神

旧約聖書における神の姿は神の義なるお方であるとの強い意識を示している。それは決して神の公義や正義対神の愛の赦しといった問題として見られてはいない。公義、愛、正義、憐れみは神の聖性の中に完全な調和をもって結び合わされている[10]。「主は岩、その御業は完全で、その道はことごとく正しい。真実の神は偽りなく、正しくてまっすぐな方」(申命記32：4)、「わたしをおいて神はない。正しい神、救いを与える神は、わたしをおいては神はいない」(イザヤ書45：21)。「主よ、都の中にいまして正しく、決して不正を行わない。朝来ごとに裁きを与え、そして光として、誤りをなさることはない。不正を行う者は恥を知らない」(ゼファニヤ書3：5)。「娘シオンよ、大いに踊れ。娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与える者、高ぶることなく、ろばに乗って来る、雌ろばの子であるろばに乗って」(ゼカリヤ書9：9)。「正しい裁きは御座の基、慈しみとまことは御前に進みます」(詩篇89：15)。

その無限の義の故に、神は何にもまして、人間の行為や態度の誤ることなき審判者でありたもう。「全世界を裁くお方は、正義を行われるべきではありませんか」(創世記18：25)。「正しく裁く神、日ごとに憤りを表す神」(詩篇7：12)。「人を高く上げるものは、東からも西からも、荒れ野からも来ません。神から必ず裁きを行い、ある者を低くし、ある者を高くなさるでしょう」(詩篇75：7－8)。しばしばわれわれは彼の正しい審判を聖書で学ぶ。「御自ら世界を正しく治め、国々の民を公平に裁かれる」(詩篇9：9)。「主は諸国の民を公平に裁かれる」(詩篇96：10)。「主は世界を正しく裁き、真実をもって諸国の民を裁かれる」(詩篇96：13)。

旧約聖書は裁きと審判とがもっている二重の意味に対して忠実である。それは正しい人々を弁護し、報いを与える。「主よ、諸国の民を裁いてください。主よ、裁きを行って宣言してください。お前は正しい、とがめるところはないと。あなたに逆らう者を災いに遭わせて滅ぼし、あなたは従う者を固く立たせてください。心とはらわたを調べる方、神は正しくいます。心のまっすぐな人を救う方、神はわたしの盾」(詩篇7：9－11)。

義はまた悪しき者を責め、罰することを意味する。「今こそ終わりがお前の上に来る。わたしは怒りを送り、お前の行いに従って裁き、忌まわしいすべてのことをお前に報いる」(エゼキエル書7：3)。「わたしは国々の間にわが栄光を現し、国々はすべてわたしの行う裁きと、彼らの上に置くわたしの手を見る」(同39：21)。

6．憐れみ深き贖主なる神

多くの人々は旧約聖書の神を公義と正義の神、国家としても個人としても、人間の上に、仮

借のない審判を執行したもう神として描いてきた。この人々はこのようにすることによって、神が早くから救いの御意志を啓示しておられること、寛容で憐れみ深い贖い主であられるという、明白な真理をぼやかしてしまつた。G・E・ライト博士は次のように指摘している。

> 旧約聖書を通じて、あるいはこの点については聖書全体を通じて、三つの主題が流されている。すなわち、神、人間の罪、救い（贖罪）の三つである。この理由から十字架は、聖書の宗教を適切に要約する一つの象徴として、いく世紀もの間立ち続けてきたし、今もなお立っている。十字架は一面においては人間の罪が、この世界の救主を十字架につけるほど深刻であることを例証し、他面においては、それは人間をその罪から贖う――必ずしも罪のすべての結果から人間を救うのではなくとも、罪の悲劇から彼を引き上げる――神の意志と力とを示すものである[11]。

神の救いの意味は、女のすえがへびのかしらを砕くという約束の中に（創世記3：15）、また神がアベルの犠牲の小羊を喜んで受け入れられた事の中に表示され、聖書の歴史の黎明とともに始まった。神がこのようなご性質の方であられるとする見解を支持する証拠として、祭司的法典の犠牲や儀式の制定、しばしば誤りにおちいる民を保護される神の配慮、特に預言者のメッセージを加えることができる。

契約の概念の中に、憐れみ給う神と赦し給う神の姿はその最高の表現を見いだす。「契約の書」と「契約の血」（出エジプト記24：7－8）は、神とその民との間に結ばれるはずの特別な関係について証詞する。その契約の約束があることによって、主の憐れみが知らされたのである。「契約の詩篇」（詩篇105篇－107篇）の中に、こうしるされている。「『恵み深い主に感謝せよ、慈しみはとこしえに』と、主に贖われた人々は唱えよ。主は苦しめる者の手から彼らを贖う」（詩篇107：1－2）。

神は御自身の民の救い主として、民を贖い、支え、保護したもう。

ヤコブよ、あなたを創造された主は
イスラエルよ、あなたを造られた主は
今、こう言われる。
恐れるな、わたしはあなたを贖う。
あなたはわたしのもの。
わたしはあなたの名を呼ぶ。
水の中を通る時も、わたしはあなたと共にいる。
大河の中を通っても、わたしは押し流されない。
火の中を歩いても、焼かれず
炎はあなたに燃えつかない。
わたしは主、あなたの神
イスラエルの聖なる神、あなたの救い主。
わたしはエジプトをあなたの身代金とし
クシユとセバをあなたの代償とする。
わたしの目にあなたは価高く、貴く
わたしはあなたを愛し
あなたの身代わりとして人を与え

国々をあなたの魂の代わりとする。　（イザヤ書43：1－4）

また、神のいつくしみが高調されている。「慈しみの御業を示してください。あなたを避けどころとする人を、立ち向かう者から、右の御手をもって救ってください」（詩篇17：7）。彼は憐れみの神であられる。「主よ、あなたは情け深い神、憐れみに富み、忍耐強く、慈しみとまことに満ちておられる」（詩篇86：15）。「恵み深い主よ、慈しみはとこしえに」（歴代誌上16：34）。ホセアの預言は報われない愛の悲しみ、そむいた民をしたい求める神の心を述べている（ホセア書11：1－4）。エレミヤ書31章31節から34節の新しい契約の輝かしい約束をもたらしたのは、不誠実な民に対するこの神の誠実さであった。

7．父なる神

神が父なる神であるということは、新約のようにはっきりとでないが、旧約聖書の神の概念の一部である。モーセは神がイスラエル人を贖いたもうた父であることをのべ、神に対する従順と忠誠とを守るように勧めている。「愚かで知恵のない民よ、これが主に向かって報いることか。彼は造り主なる父、あなたを造り、堅く立てられた方」（申命記32：6）。契約の箱を移し迎えた際にダビデによって作られたと信じられている詩の中には次のように記されている。

神に向かって歌え、御名をほめ歌え。
雲を駆けて進む方に道を備えよ。
その名を主と呼ぶ方の御前に喜び勇め。
神は聖なる宮にいます。
みなしごの父となり
やもめの訴えを取り上げてくださる。　（詩篇68：5－6）

イザヤはその慰めの書の中で王に祈って述べている、「あなたはわたしの父です。アブラハムがわたしたちを見知らず、イスラエルがわたしを認めなくても、主よ、あなたはわたしたちの父です。『わたしたちの贖い主』これは永遠の昔からあなたの御名です」（イザヤ書63：16）。「しかし、主よ、あなたは我らの父。わたしたちは粘土、あなたは陶工、わたしたちは皆、あなたの御手の業」（同64：7）。エレミヤは述べている「彼らは泣きながら帰って来る。わたしは彼らを慰めながら導き、流れに沿って行かせる。彼らはまっすぐな道を行き、つまずくことはない。わたしはイスラエルの父なり、エフライムはわたしの長子となる」（エレミヤ書31：9）。ホセアの神の約束を伝える、「イスラエルの人々は、その数を増し、海の砂のようになり、量ることも、数えることもできなくなる。彼らは「あなたたちは、ロ・アンミ（わが民でない者）」といわれるかわりに「生ける神の子」と言われるようになる（ホセア書2：1）。マラキは神が父であられるからお互いに正直と誠実を持って接っするべきであると言っている、「我々は皆、唯一の父を持っているではないか。我々を創造されたのは唯一の神ではないか。なぜ、兄弟が互いに裏切り、我々の先祖の契約を汚すのか」（マラキ書2：10）。

おわりに

われわれはキリスト教学Ｉの前期の学びで旧約聖書の恒久的なメッセージとその意味とを概

観しようと努めてきた。旧約聖書はその成就を新約の中で見いだすが、旧約聖書はそれとしてなお無限の価値を提供している。その神概念、その歴史哲学、その人間の鋭い分析、その救いの希望、その宗教を教えるための資源――すべては注意深く研究者に豊かな報いを与えている。今回のレポートの試みは、序言の序言に過ぎない。大まかな輪郭が描かれたのみである。今後は、神の言のこの大きな部分として広汎な親しみを開拓し、はてしない詳細の富を獲得したいと思っている。

註

(1) G. E. Wright, *The Challenge of Israel's Faith*, p.99.

(2) O. J. Baab, *The Theology of the Old Testament*, p.23.

(3) N. H. Snaith, *The Distinctive Ideas of the Old Testament*, p.9.

(4) Baab, *op. cit.*, Cn. 2 ; A. C. Knudson, *The Religious Teaching of the Old Testament*, pp. 49 − 191 ; H. W. Robinson, *Religious Ideas of the Old Testament*, pp.51 − 76 ; Cf. Snaith, *op. cit.*

(5) Baab, *op. cit.*, p.24.

(6) *Ibid.*, pp.26 − 29.

(7) G. F. Oehler, *Theology of the Old Teatament*. pp.120 − 34で論じられている所を参照。

(8) Baab, *op. cit.*, p.34.

(9) B. P. Bowne, *Theism*, p.286 − Knudson, *op. cit.*, p.137に引用されている。

(10) Robinson, *op. cit.*, p.70.

(11) Wright, *op. cit.*, p.19.

参考文献

Otto J. Baab, *The Theology of the Old Testament*, New York & Nashville, 1949.

C. H. Dodd, *The Bible Today*, Cambridge, 1947.

Albert C. Knudson, *The Religious Teaching of the Old Tstment*, New York, 1919.

Park Hays Miller, *How to Study and Use the Bible*.

G. F. Oehley, *Theology of the Old Testament*.

George L. Robinson, "The Abiding Value of the Old Testament," in Barbour, *The Bible in the World of Today*.

H. Wheeler Robinson, *The Religious Ideas of the Old Testament*, New York, 1913.

John R. Sampey, *Syllabus for Old Testament Study*.

Norman H. Snaith, *The Distinctive Ideas of the Old Testament*, Philadelphia, 1946.

G. Ernest Wright, *The Challenge of Israel's Faith*.

『新共同訳聖書』1987年版。

『口語訳聖書』1962年版。

（レポート指導教員　山田耕太）